

## 魔界京都・・・六道の辻あたり

コミュニティーとか環境の問題は、今あらためて関心を向けざるをえなくなったトポス（場）の問題であるが、中村雄二郎によれば、そもそも「場所」というものは、そんなコミュニティーとか環境というような〈存在根拠（基体）としての場所〉のほかに、〈身体的なものとしての場所〉、〈象徴的な空間としての場所〉、そして〈論点や議論の隠された所としての場所〉の三つがあるという。

三つめの〈論点や議論の隠された所としてのトポス場所〉というのが、私のいうところの「知のトポス」である。もっとも典型的な「知のトポス」は歴史的、文化的な場所であろう。その先のテーマを論ずるなかで場所のもつ意味が定まってくるから、人それぞれが自分の「知のトポス」を作ることになる。

私は、平和を論ずるために平和を考える旅をし、武家社会の源流を論ずるためにその由来を訪ねる旅をしている。私は今ここで「うしろど後戸」の神というキーワードで「平和の原理」を論じようとしている。したがって、「後戸」の神、つまり怨霊、鬼、妖怪など日本のスピリットが出没する「場」が問題となる。京都はそういったスピリットがあちこちに出没する魔界都市だ。ここでは紙枚の関係があるので、とっておきの「場所」を紹介するにとどめよう。

それは京の「六道の辻あたり」である。私にとって欠かすことのできない「知のトポス」である。

私は、文化の両義性を論ずるために『源氏物語』をとりあげ、地獄の旅をしたことがある。

源氏物語の圧巻は宇治十帖であり、その伏線として六条御息所が重要な役割を果たしている。私は源氏物語の宗教的な側面に焦点を当てて人生の二面性を語ろうとしている。いくなれば天国と地獄である。急いではいけない。天国を語る前にどうしても地獄を語らねばならない。

私はまず、六条御息所の持つ地獄性について語った。

彼女の怨みの霊は、源氏ではなく、源氏の恋人たちに向かうのだ。次々と怨みを晴らしていくのである。娘の斎王に同行して伊勢に下りやがて死ぬのだが、彼女の霊は彼女が死んでもなお、源氏の愛人に取り付くのである。すさまじい霊の執念である。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/rokujiyou.html>

次いで私は、紫式部の隠れた世界として、地獄の世界を語った。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/jigokuta.html>

地獄の旅のなかに、紫式部と並んで小野篁（おののたかむら）（802～852年）が欠かせない。小野篁は、平安時代初期の文人にして貴族、野宰相と称されている。小野小町の祖父であり、毎晩冥府に通い、閻魔王庁で裁判を手伝っていた人物である。では、この不思議な人物・小野篁はどんな顔をしているのか、その像を見てみよう。その上で、その恐ろしい小野篁と市井の聖者といわれた空也との繋がりを少し考えてみたい。とても繋がりそうもない人が深く繋がっていますからね。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/onotokuu.pdf>

六道の辻あたりはまさに典型的な「知のトポス」である。ぜひとも一度は出かけてみていただきたい。

場所は加茂川の東、松原通りは東山通りを西に下りたところにある。河原町通りから歩いて十分くらいだろうか。轆轤（ろくろ）町という。昔は髑髏（どくろ）町とっていらしい。この地は、ずっと南にかけて鳥辺野（とりべの）とって、化野蓮台野（あだしのれんだいの）と並ぶ葬送の地であったから、風葬の習慣がなくなってからも髑髏（どくろ）があちこちに散在していらしい。加茂川から東はそういう髑髏の地であり、六道の辻は言うなれば冥界への入り口であった。華やかな都の異境の地である。まずこのことを念頭においてもらいたい。

劇場というのは、劇が演じられているから劇場であり、何も演じられていないときに劇場に行っても意味がない。それと同じように六道の辻も御盆のとき（8月7日～10日）以外は何の変哲もない場所である。ところが、御盆にはがぜん様子が変わって刺激的な場所となる。かつては髑髏の地、冥界への入り口らしい雰囲気が出される。

御盆のときには、地元では「六道はん」と呼んでいるが、六道詣りという精霊迎いの行事が行なわれる。六道はんとは珍皇寺のことをいうのだが、六波羅密寺や西福寺でも特別回向が行われる。もちろん主役は珍皇寺である。珍皇寺の境内だけでなく松原通りにも若干の店が出る。「幽霊飴」の店が出たりして昔の雰囲気がよみがえる、貴重な「知のトポス」なのだから地元の商店はもう少しそれらしく演出をしたほうがいいのではないかとつい思ってしまう。

門前の花屋で高野槇を買い求めて帰るのが習わしだが、最近では家に持ち帰らないで寺に納める人も少なくないようだ。精霊はその槇の葉に集まって家に帰るとされているのだが……。誠に残念なことだ！ 本来は御盆のあいだは家で祖先の精霊とともに過ごすものだろう。今は地獄の思想が疎かになっているので、家で御盆の行事をする家も少なくなった。このことがまさに問題なのであって、家とは何か、地域とは何か、「場所」とは何か、「場所の論理」とは何か……よくよく考えねばならないのではなかろうか。六道詣りの活性化を図るべきだと私は思う。

では「六道まいり」に関する私のホームページをご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/6domairi.pdf>

珍皇寺の公式ホームページは次のとおりである。

<http://www.rokudou.jp/>

六波羅蜜寺と西福寺については、このあと若干の補足説明をするが、とりあえず次のホームページをご覧ください、全体の感じをつかんでいただきたい。

六波羅蜜寺：<http://rokuhara.or.jp/>

西福寺：<http://komichin.blog80.fc2.com/blog-entry-308.html>

六道の辻は、角に西福寺がある。壇林（だんりん）皇后ゆかりの古寺である。嵯峨天皇の皇后・橘嘉智子、俗に壇林皇后はこの西福寺にたびたびお詣りになったようである。篤く帰依しておられたようだ。皇太子が患われたときも西福寺の地蔵尊に病氣平癒を祈願し、皇太子は無事天皇に即位できた。仁明（にんみょう）天皇である。壇林皇后がこんな髑髏（どくろ）の地にお越しになるということは、よほどの思いがあったことだろう。それにしても皇后がこういう異境の地をたびたび訪れたということは、天皇制の両義性を考える上でも重大な意味を持っている。

ところで、仁明天皇の子が空也上人だという説もあり、もしそうだとすれば、この地に六波羅蜜寺があるのもうなずける。空也上人という存在も、天皇制の両義性を考える上でとても重要な意味を持っている。はたして空也上人が仁明天皇の子であったかどうかは定かではないが、空也上人が貴種（きしゅ）（天皇家の人間）であることは間違いないとされている。そうでありながら、**空也上人はまさに市井の聖人**として崇められた。

天曆五年（951年）、京都は悪疫が流行って人々はばたばたと死んでいった。多くの遺骸が埋葬もされず路傍に放置されている京の町を、空也上人は自らが刻んだ金色の十一面観音を車に載せて念仏を唱えながら歩き回り、生者の一人一人に仏前に供えた茶をふるまった。するとたちまち疫病は鎮まったという。空也上人はおびただしい死者の供養のために西光寺を建て、悪疫をもたらず死霊の祟りを鎮めるために十一面観音を本尊とし、梵天・帝釈天を納めた。空也上人没後五年、西光寺は六波羅蜜寺と名を改めた。

さて、仁明天皇ゆかりの西福寺の地蔵尊はまことに靈驗あらたかで、みやこ人は「子育て地蔵尊」として篤く信仰したといわれている。なお西福寺では、かつて、毎年御盆には住職によって絵解きが行なわれていたが、住職が亡くなったので今ではそういう行事はなくなった。お盆には地獄絵が掲げられてはいるが、残念なことである。そして地獄絵は



珍皇寺でもお盆に掲げられている。住職による絵解きの復活が望まれるが、まあ地獄絵が掲げられるだけでも全国的に珍しい習わしではなかろうか。みなさんも御盆の時（8月7日～10日）に六道詣りをされ、「地獄の旅」の雰囲気味わってみられてはどうだろう。



西福寺の地獄絵

( <http://blogs.yahoo.co.jp/kyotosyasin/44003361.html> より)

すべては因果応報、悪いことをしたら地獄に落ちる。この地獄の思想は、古代仏教でいうところの「縁起説」である。すべては因果関係で生ずるゆえ、すべては独自に自足的に存在するのではなく、それをあらしめている原因に依存して無常である。因果応報・・・南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。これはまさしくホワイトヘッドの「象徴の哲学」の世界でもある。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・。

さて、魔界とは、私の定義によれば、気味の悪い霊、怨霊、妖怪、鬼、天狗などの出没する場所又はそれらに出会うための場所や通路のことである。さらに、あの世など異界への出入り口も、広義の意味では魔界と言っても良いかもしれない。

魔界というものを理解する上で大事なものは、両頭切断して絶対的認識に立つ時、ひっくり返し現象が起こるということである。その典型が怨霊の御霊へのひっくり返し現象である。魔界に神社や寺院が建てられ、大宮司や大和尚を始原として、多くの人の祈りが捧げられていくと、魔界は聖地になり得る。魔界というものは、ほとんどのところがそういう両義性を持っている。魔界でありかつ聖地であるし、魔界でもなく聖地でもない。戻り橋や鞍馬や伏見稻荷もそうだが、六道の辻もそうであり、特に、六道の辻の場合は、「まじない文化」と並んでもっとも典型的な日本文化である「えびっさん」があつて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・」という祈りが、「わはっはっは、わはっはっは」という福の神信仰にひっくり返っている。そういう両義性を持っている「六道の辻」はまさに典型的な「知のトポス」である。



えびっさん

( <http://kurayo4.exblog.jp/7931335> より)